

平成二十八年七月

聞見会新聞 特別号



安心してお念仏できる場所

聞見会

御同行より

興禅寺さま報恩講にて

小合あゆみさん 寄稿

〈ご讀題〉

「ああ、この大いなる本願は、いくたび生を重ねてもあえるものではなく、まことの信心はどれだけ時を経て得ることはできない。思いがけずこの真実の行と真実の信を得たなら、遠く過去からの因縁をよるこべ。

もしまた、このたび疑いの網におおわれたなら、もとのように果てしなく長い間迷い続けなければならないであろう。如来の本願の何とまことであることか。摂め取ってお捨てにならないという真実の仰せである。世に超えてたぐいまれな正しい法である。この本願のいわれを聞いて、疑いためらつてはならない。」

(顯浄土真実教行証文類

総序 現代語訳)

〈ご挨拶〉

みなさん、こんにちは。今日はこちら興禅寺さまの報恩講法要にお参りさせていただき、ありがとうございます。

わたしは大阪から参りました、小合あゆみと申します。どうぞよろしくお願いたします。

いつもは、今、みなさんが座っておられる場所に座ってお聴聞しています。今日はこちらに立たせていただいて、阿弥陀さまに見守られながらお話をさせていただいておりますが、たいへん緊張しております。みなさんにリラックスして聞いていただくと、私もリラックスできると思っていますので、よろしくお願いたします。

〈報恩講〉

さて、報恩講というのはわたしたち真宗門徒にとって、一番大切なご法事です。

一月におつとまりになります、ご本山での御正忌報恩講にお参りできるように、お別院やそれぞれのお寺では、時期を早めて「おとりこし」と呼ばれる報恩講がおつとまりになります。

この報恩講ですが、親鸞聖人のお徳を讃え偲ぶだけではないのではないかなあと思っています。

二千五百年前にお釈迦さまが悟りをお開きになつて、そのみ教えがインドから中国を経て日本に伝えられました。教えだけがぼんと日本に伝わることはなくて、多くの方たちのご苦労があつて日本に伝えられました。

中国からインドにお経さまを求めて旅をしてくださった三蔵法師と呼ばれる方々。日本に伝えられた仏教をよりどころとしようと、仏教を広めてくださった聖徳太子さま。命がけで日本に渡つてこられた鑑真和尚。中国に行つて仏教を学んでこられた空海さまや最澄さま。数多くのお経さまの中から、私たちに必要なお経さまを選び勧めてくださった七高僧さま。

たくさんのお坊さま方、そしてそのお坊さま方を支えてくださった方々のご苦労とお働きによって、お浄土のみ教えは親鸞さまに届けられました。

そしてそのみ教えは、またたくさんの方々によって、今、ここに伝えられています。

ます。
お坊さまだけではありません。先だっていかれた有縁の方々、そして今、一緒に時を過ごしている有縁の方々によって、伝えられ届けられてきたお浄土のみ教えです。
ですから、この報恩講さんは、親鸞聖人、そして多くの多くの方々に、想いを馳せる法要ではないかなと思います。

〈自己紹介〉

わたしは大阪生まれの大阪育ちで、今も大阪に住んでおります。私の実家は両親と私の三人という、典型的な核家族でした。

さて、みなさんのおうちにはお仏壇がありますでしょうか。お寺にお参りくださっているみなさんなので、だいたいのおうちにはお仏壇があるかもしれません。私の実家にはお仏壇がありません。お仏壇に手を合わせることも、お念仏申すことも知らずに育ちました。

「おてつぎのお寺」というのも父が往生するまで、ありませんでした。
ですから、自分の家のご宗旨がなんなのかということも知らずに育ちました。大谷は龍谷大学に通っていました。仏教にご縁ができたのはここ数年のことになります。

〈帰敬式、法名〉

わたしには二人、娘がおります。そのうちの長女が、大阪の本町にある相愛中学校に進学しました。相愛中学校は本願寺の宗門校です。

相愛では、朝夕の礼拝、週に一度の講堂礼拝、月に一度のご命日法要、そして親鸞聖人の降誕会法要、報恩講法要を大切におつとめしています。

わたしも保護者会の役員をさせていただいて、降誕会や報恩講の法要にお参りさせていただきました。そうすると大学の時に歌った恩徳讃や真宗宗歌が思い出されました。学生の時には出なくちゃいけないから出ていた法要で歌っていた歌が、実は身に染みていたということなのかもしれません。

相愛高校を卒業する生徒さんは、ご本山に卒業奉告参拝に行きます。そのとき、帰敬式、おかみそりを受けることができます。相愛の生徒さんは大変素直で、ほとんどの生徒さんがおかみそりを受けます。そのときに保護者も一緒におかみそりを受けることができます。そのおかげで、長女と一緒に帰敬式を受けることができました。

帰敬式を受けるといただけるものが三つあります。法名と、記念の門徒式章と、お念珠です。今日の門徒式章はその時の

式章です。

ご案内のほがきにも紹介していただいていたのですが、わたしの法名は「釋淨真」といいます。

ほかのご宗旨では戒名と言いますが、浄土真宗には守りなさいと言われる戒律はありませんから戒名ではありません。

浄土真宗では法名と言います。わたしたち門徒は「仏法、おみのりをよりどころとして生きていく」のですから、法名なのではないかと思えます。

この法名ですが、二枚の紙が入っています。一枚には法名が書かれています。もう一枚には、この法名の出典、いわれが説明されています。

「釋淨真」という法名を見たときに、はつとしました。

というのは、亡くなった父の法名が「釋淨道」と言って、同じ「淨」の文字が入っていたからです。

そして、この法名はとても説明しやすいんですね。浄土真宗の「淨」に、浄土真宗の「真」と説明すれば、たいいていわかっていただけです。

この法名はわたしに「浄土真宗の門徒として、おみのりをよりどころとして生きていくのだ」ということを示しています。

名前には、名前を付けてくださった方々の思いや願いが込められています。私の俗名は「あゆみ」ですが、これは母が「い

しだあゆみ」さんのファンだったからです。母の思いが、この「あゆみ」という名前に込められています。

同じように、私がいただいた法名にも、阿弥陀さまの思い願いが込められているでしょう。私の生きていく道、生き方を示してくださっているのだと思えます。

もし、みなさんの中で、帰敬式、おかみそりをまだ受けておられない方がおられましたら、ぜひ、帰敬式、おかみそりを受けていただいて、阿弥陀さまの思い願いの込められた法名を受け取っていただきたいと思えます。

〈宗教について〉

少し話はかわりますが、わたしは小学校、中学校の合わせて九年間、カトリックの学校に通っていました。

その学校では、年に何回かミサに出席します。

ミサのとき、カトリックの信者さんは、一番前の席に座っています。

ミサの途中に、聖体拝領(せいたいはいりょう)という儀式があります。

信者さんは、パンと呼ばれる薄いおせんべいのようなものを神父さまからいただきます。

小学校低学年だと、口を開けていると神

父さまが口の中にほんとに入れてくださいます。ちよつとうらやましいなあと思ひながら見ているわけです。

小学校四年生か五年生のときに、今まで私たちと同じところに座っていたクラスメイトの一人が信者さんの席に座っていました。そのクラスメイトは、おとうさん、おかあさん、そのクラスメイトの家族三人で、みんなカトリックの信者さんになったのだそうです。

あとで聞いたのですが、カトリックの信者さんになりたいと言つても、すぐになれなかつたそうです。何度もシスターや神父さまから、ほんとうに信者になるのか確認され、勉強もなされたそうです。そういえば、その学校にいた九年間、カトリックの信者になるように言われたことは一度もありませんでした。

龍谷大学に四年間通っていました。それでも浄土真宗の門徒になるように言われたことはありません。

世間には教えをおしつけるような宗教や、人の弱みに付け込むような宗教もありますが、ほんとうの宗教はそんな押しつけや押し売りのようなことはしないのだと思います。

〈見えているもの〉

話を戻します。

仏教に縁のない生活をしていた私ですが、先ほどもちろつと申しましたように、龍谷大学で四年間学びました。

入学式の会場はできたばかりの顕真館という礼拝堂でした。

正面に「南無阿彌陀仏」と書かれていて、仏教の大学に來たのだと実感しました。

大学では一年間「仏教学」という授業がありました。特に印象に残ることはありませんでした。

こんな話を聞いたことがあります。人間は見えている風景は同じでも、見ているものはそれぞれ違うのだそうです。みなさんはわたしのほうを見ておられますが、同じものを見ているか?といえは少しづつ違います。

私を見ておられる方もおられるし、阿彌陀さまをご覧の方もおられるし、ふだんは見られないご絵伝を見ている方もおられる、空模様が気になる方もおられる、時計が気になる方もおられる。

みんな同じところにおいて同じ方を向いていても、見ているものは違います。自分の興味、関心のあるものを見ています。その話を聞いて思い出したことがあります。

大学三年生、四年生の二年間、本願寺の南隣にある大宮学舎とよばれる校舎に通っていました。

大宮学舎には、京阪電車の七条駅からまっすぐ西へ西へと七条通を歩いていきます。

しばらく行くと、左手に京都タワー、右手に東本願寺が見えてきます。大きな交差点を渡って、さらに西に向かうと、右手奥に西本願寺、手前に興正寺、そして交番が見えます。

そして、興正寺会館があつて、郵便局があつて、大宮学舎の門があります。

ところがわたしの記憶に残っているのは、交番と興正寺会館と郵便局なのです。あんなに大きな東本願寺も西本願寺も私には見えていませんでした。

せつかく四年間、龍谷大学に通っていたのに、仏教は遠いところになりました。

〈クラブの話〉

さて、大学時代、何をしていたかという、いちおう勉強もしていましたが、クラブ活動もしていました。龍谷大学では放送局というのですが、普通に言えば放送部です。

放送局というクラブはちよつと特殊なクラブでした。たとえば陸上部なら、それぞれの競技の

練習して、試合に出ます。吹奏楽部なら、練習をして、演奏会を開いたり、コンクールに出たりします。

ところが放送局は、自分たちの活動以外の活動もしなくてははいけませんでした。

大学祭、龍谷大学では龍谷祭といいますが、放送局として企画・番組をつくる一方で、たとえば野外ステージでの企画のためにマイクやスピーカーなどの機材をセッティングして、その機材を操作するミキサーを派遣しなければいけません。

アナウンサーを派遣することもありますが、時には企画作りから関わることもあります。

ですから、十一月の龍谷祭に向け九月からずつと準備をしています。朝の九時から夜の九時まで授業の合間を縫って準備をするという、かなり忙しいハードな毎日でした。

〈後輩の死〉

大学三年生の時、龍谷祭が終わって十日ほど経った十一月十五日の朝方、一つ下の後輩が突然、亡くなりました。突然と言つても、事故ではなく、病気で亡くなりました。

彼が小さいころ、小兒ぜんそくだったという事は聞いたことがありました。でも、ふだんの彼は咳をすることもなく普

通に生活していました。私の目には元気に見えていたのです。

しかし実は、龍谷祭の始まる前から随分と体調を崩していて、毎晩、床に就くとぜんそくの発作に苦しんでいたのだそうです。ぜんそくの発作を抑える「吸入器」を使って、なんとか発作を鎮めていたそうです。

ぜんそくは体力も奪います。

彼は龍谷祭が済んで、後片付けなども終わった後、クラブを休むかやめるかしよと考えていて、同じ学年の仲間と相談していたのだそうです。

最後の夜、下宿に帰って床に就いた彼は、ぜんそくの発作に襲われます。いつものように

吸入器を使っていたのですが、毎晩、吸入器を使っていたために薬剤が無くなっていて、発作を抑えられませんでした。

すぐに救急車を呼んでいけば、助かったかもしれません。けれど、真夜中に救急車を呼ぶことをためらった彼は、朝方まで我慢して、少し明るくなってから隣の部屋の友達に救急車を呼んでもらったそうです。しかし、間に合いませんでした。どれほど苦しかったことか。

どれほど恐ろしかったことか。このまま死ぬのではないかと考えていたかもしれない。

わたしは先輩だったのに、彼がぜんそくで苦しんでいることにまったく気づくことができませんでした。苦しみのなかで、彼は命終えていってしまいました。厳しい言葉でいえば、わたしは彼を死なせてしまった、もつと言えれば、殺してしまつた。なぜ気づけなかつたのか。そういう思いは、今も残っています。

彼の実家で営まれたお葬式のあと、会葬礼状と一緒に清め塩が配られました。そのとき、ひとりの後輩が、清め塩を握りしめて「こんなもん、いらん。清め塩をまかへんかつたら、あいつがついてくるって言うんやつたら、ついてきたらいい。わしが連れて帰つたら」と叫びました。わたしはそのとき初めて、清め塩の意味がわかりました。

亡くなった人のことを遠ざけるために清め塩をまくのだ、亡くなった人を穢れたものとしてみるのだということを知りました。

生きていようが死んでいようが、大切な後輩です。亡くなった彼を遠ざけたいと思いませんし、ましてや穢れているなど思うわけがありません。清め塩をまく必要はありません。

今になって気づいたことがあります。それは亡くなった後輩のご両親が、わたしたちのことを一言たりとも責めたりな

さらなかつたことです。それどころか、大きなイベントなどの時には、差し入れをたくさん持ってきてくださるようなご両親でした。

学生の時には、そのありがたさがわかりませんでした。親とやらせていただいで、わたしがあのご両親の立場であつたなら、あのような振る舞いができるだろうか？

なぜ、息子の変調にきづかなかつたのかと責めるのではないだろうか。

私たちはご両親に責められてもおかしくなかつたと思います。でもご両親は、まるでわたしたちのことを自分のこどものように大切にあなたかく接してくださいました。

息子を失って悲しみの真つただ中にご両親に、わたしたちは助けられ支えられていたのだとわかるようになりました。

大学を卒業し、就職し、結婚し、子どもにも恵まれました。順風のように見えるかもしれませんが、辛いことや大変なこといろいろありました。なんでこんな目にあうのか？ と悩まない日はありません。

もともと小さいころから、生きていくことはしんどいと思ってきました。居場所を見つけれなくて、「わたしは生きて

いていいのかな」といつも不安で自信がありません。

ですから嫌なことやつらいことがあると、消えてしまいたくありません。生きてはいけいけないのかなと思います。

消えてしまいたい、生きるのはしんどいと思つているけれど、それでも生かされているわたしであります。

いつのころからか、何かに行き詰つて、なにもかもうやだとか、もう消えてしまいたいと思うときに、彼を思い出すようになっていました。

彼にはきつと、したいことがあつて、やりたいものがあつたと思います。

けれども、彼は、あの朝、すべてを奪われました。

わたしが経験している、楽しいことも辛いことも嬉しいことも悲しいことも、彼は経験できません。

あの朝、すべてのものから手を離してしまいました。

わたしは、彼のしたかったことを代わりにするとか、彼の分まで生きるということとはできません。

彼のために生きるとか、彼の代わりに生かすことが成し遂げるとか、そういう生き方はできません。けれど、生かされている以上、彼が経験できないできごとをしつ

かり受け止めていきたい。

個人的な体験、たとえば、就職、結婚、出産、育児、父親の死。そして、社会的な体験、震災やさまざまな事件や事故。

嬉しいことも悲しいことも、楽しいことも辛いことも、あの日、彼は奪われてしまいました。

私にできることは、あの日、彼が奪われてしまった様々な体験を、私なりに受け止めること。

私はかっこいいことも、人の役に立つこともできないけれど、それらの体験から目をそらさずに、しっかりと見つめ、受けとめること。

そして、わたしが死ぬ瞬間に「とにかく生き抜いてきたよ」と彼に報告したい。

そう思うようになっていました。

生きていることに自信がなくて、いまでも「わたしはいなくていいのではないか」と思っている私にとって、「生き抜く」ことはしんどいことです。

わたしにとって生きることは、ちょうど「平均台」の上を歩いているような感じ

です。ちょっとしたことでもぐらついて、そして「もう落ちてもいいかなあ」と思います。そのときに、落ちないように支えてくだ

さっているのは、もちろん、今一緒に生きている家族や友人ですが、それ以上に亡くなった後輩の力を感じます。

〈二十四回忌法要〉

今から数年前、彼の二十四回忌法要がとまりました。

わたしは、昔の仲間にあうのはあまり好きではありません。

行こうと決めたのは当日の朝でした。ふつうの同窓会なら行かなかったと思います。

ご法事だから行かなければならないと思ってお参りしました。

お葬式の日、「清め塩なんかいらん」と言った後輩が、お坊さんとしてご法事を進めてくれました。

亡くなった後輩がわたしを阿弥陀さまの前に座らせてくれました。このご法事は亡くなった後輩を通して、わたしが生かされていることを気づかされる場でした。

同じメンバーが集まるとしても、同窓会という時間と空間より、阿弥陀さまの前に座る時間と空間のほうが、わたしの心は落ち着き満たされるのです。

わたしがお聴聞を続けているのは、お寺

の時間と空間が私には大切で必要だからなのかもしれません。

〈局葬／信楽先生〉

わたしの記憶からはすっぽり抜け落ちているのですが、彼の実家でのお葬式のと、局葬、つまり放送局の葬儀をしたのだそうです。

その局葬でご法話をしてくださったのが、先日ご往生なさった信楽峻磨先生でした。信楽先生は当時、龍谷大学の文学部長で、わたしたち放送局の顧問をしておられました。そのご縁で

ご法話をしてくださったのです。数年前、ある先輩が信楽先生と出席する機会があったそうです。

信楽先生に「昔、龍谷大学の放送局にいました。そのとき、現役で亡くなった後輩の局葬の際に、信楽先生からご法話をいただきました」と伝えると、信楽先生は「よく覚えていて」とおっしゃったそうです。二十年以上前のできごとを覚えていてくださったことを、たいへんありがたく思いました。

わたしには様々な出会いがありますが、お念仏でつながっている出会いを不思議で、ありがたく思います。

〈お仏壇を迎える〉

ここに釋徹宗先生の著書『いきなりはじめる仏教生活』という本を持ってきました。このなかに「軸のある生活」というお話があります。

「生活の中に、居住空間の中に明確な軸を設定してみませんか。しかも、精神的なものではなくて、儀礼的なものです。どんなものでもいいんですよ、いわゆる〈壇〉を設けるわけです。見えないけれど限らないのちである仏さまをおまつりする。」とあって、図がかいてあります。

「ご本尊も自分で仏さまを描いてもいいし、「南無阿弥陀仏」や「南無妙法蓮華経」と字で書いてもいい。この居住空間の軸ができれば、嬉しいことがあればここで語りかけ、悲しいことがあれば告白し、苦悩があれば相談する。何か贈り物をもったらここににお供えする。・・・と書いてあります。」

お仏壇のある生活をなさっている方にとっては、きつといつもしている当たり前のことが書かれていると思います。

わたしは初めてこれを読んだとき、「そんなこと、できるわけない。この人、なんにもわかってない」と思いました。

長男の嫁が、主人の実家のご宗旨とは違

うご宗旨のご本尊を置くことができると思えませんでした。広いうちで、わたしの部屋があつたり、誰にも邪魔されない場所があつたりすれば可能かもしれませんが、我が家は狭くてとても浄土真宗のお仏壇を置くことはできない。そう思っていました。

父が亡くなり、四十九日までの、いわゆる中陰の間、実家ではなくて私の家中陰のお飾りをして、お寺さんに七日七日のお参りに来ていただけていました。ご本尊はお寺さんにお借りしてました。四十九日が済むと中陰のお飾りは葬儀屋さんが、ご本尊はお寺さんが、帰って帰ってしまいます。

わたしは自分の家にお仏壇、ご本尊をお迎えしたいと思うようになっていました。けれども、小合の実家に行けば、日蓮宗のお仏壇があります。長男の嫁の立場で、浄土真宗のお仏壇を家にお迎えしたいとはなかなか言えませんでした。

母とも相談して、「だめでもともと」と聞き直つて、まず主人に「うちに浄土真宗のお仏壇を置きたい」と話しました。主人からは「俺はいいけど、実家に聞いてみないと」と返事がありました。そこで主人の実家のご両親に話したところ、

ろ、なんの反対もなく、すんなり話が通つたのです。もしかすると主人も実家のご両親も、お仏壇は亡くなった人が入る場所、と思つているのかもしれないが、思いのほか、すんなりとお仏壇をお迎えすることができました。

亡くなった父は、いとも簡単に、我が家に阿弥陀さまをお迎えするというハードルを越えさせてくれました。父はわたしに、わたしが安心して座れる場所を作ってくれました。

死んで終わりではないということ、亡くなった後輩も父親も、そして信楽先生も、私に教えてくれました。

〈往相還相〉

「往相還相」というおことばを、お聴聞のなかでお聞かせいただきます。

「往相」というのは、娑婆の縁がつきたとき、お浄土に往生させていただいてそこで仏さまに仕上げていただくのだとお聞かせいただきます。

私たちの宗旨は、そこで終わりではありません。

仏さまとならせていただいて、阿弥陀さまのおはたらきをお手伝いさせていただく、娑婆で苦しんでいる有縁の方々が阿

弥陀さまのみ教えに出遇つていただくお手伝いをするという役割をいただきます。それが「還相」です。

亡くなった後輩も父も、わたしにとって「還相」の菩薩さまとして働いてくださっている。これはわたしにとって間違いのない事実なのです。

〈報恩講の歌〉

「報恩講の歌」という歌の二番の歌詞はこのようななっています。

「一人居ても 喜びなば 二人と思え 二人にして 喜ぶおりは 三人(みたり)なるぞ
その一人こそ 親鸞なれ」という歌詞です。

これは

(二人で阿弥陀さまの慈悲を喜んでおられる方は二人と思つていただきたい。

二人で喜んでおられる方は三人と思つていただきたい。

その一人とは私親鸞であると思つてください。)ということですが。

「御臨末の御書」と呼ばれる親鸞聖人のお手紙をもとに書かれた歌だそうです。わたしはこの歌詞が大好きです。

わたしにはいつも、阿弥陀さまと、そして仏さまとなられた親鸞さまや後輩や父や、大勢の方が一緒に生きてくださっ

ているのだと感じることができからです。「決してひとりにはしない」とおっしゃつてくださる阿弥陀さまのことばを実感できるからです。

〈顕浄土真実教行証文類 総序〉

一番はじめに読ませていただいたご文は、親鸞聖人の主著である「顕浄土真実教行証文類」の「総序」と呼ばれる箇所現代語訳です。

書き下し文を拝読させていただきます。

「ああ、弘誓(くげい)の強縁(ごうえん)、多生(たしょう)にも値(もうあ)ん、ひがたく、真実の浄信、億劫(おくごう)にも獲(え)がたし。たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。もしまたこのたび疑網(ぎもう)に覆蔽(ふへい)せられば、かへつてまた曠劫(こうごう)を経歴(きょうりやく)せん。誠なるかな、摂取不捨の真言、超世希有(ちようせきゆう)の正法(しようぼう)、聞思(もんし)して遅慮(ちりよ)することなかれ。」お聞きになったことがある方もおられると思います。

この初めの「ああ」は漢字にすると「噫」と書くのだそうです。これは強く感動したり、驚いたりしたときに発する「ああ」なのだそうです。親鸞聖人が仏法に出遇えたよるこびがあふれた「ああ」なので

す。

仏法に出会うことは簡単なことではありません。わたしも随分と時間がかかりました。

龍谷大学に四年間学び、手に届くところに仏法はあったのに、気が付きませんでした。後輩を亡くしたときも、仏さまを感じることはなかなかできませんでした。けれども、どんなときも阿弥陀さまからのおはたらきの中にわたしはありました。ようやく阿弥陀さまに気づかせていただき、自分を照らし出していただき、自分の浅ましさを、愚かさに気づかされるようになりました。

生きていていいのかと不安なわたしを支えてくださっている阿弥陀さまでありました。

〈竹中先生〉

最後にこの言葉をご紹介させていただきます。

これは真宗大谷派の竹中智秀先生のお言葉です。

「如来の 摂取不捨の心を学び、真実、自分自身のしたいこと、しなければならぬこと、できることを、他人とくらべず、あせらず、あきらめず、してごう」竹中先生はこの「摂取不捨」に「えらば

ず、きらわず、見せず」と、振り仮名をふってくださっています。阿弥陀さまは、ある者だけを選ぶということを選ばない、ある者だけを嫌うということを選ばない、すべてのものを見守り続けてくださる、ということでしょう。

阿弥陀さまのたてられた願いは、わたしがそうではないという現実からたてられた願いだと聞かせていただきます。

わたしの都合にあえば「この人はいい人だ」と選び、わたしの都合にあわなければ「この人はいい人」と嫌い、親しくなつてもちよつとしたことで離れていってしまうわたしの現実があります。

阿弥陀さまはこんなわたしを捨てないとおっしゃってくださいます。そのおことばを素直に受け取ると同時に、少しでも阿弥陀さまの願いにかなうわたしになりたいと思います。

そして竹中先生はこのように続けてくださいます。

「自分のしたいこと、しなければならぬこと、できることを、他人とくらべず、あせらず、あきらめず、してごう」生きることに自信のないわたしに、このことばは輝いて聞こえてきます。

阿弥陀さまの「生き抜いておいで」のおことばと、この竹中先生のおことばは、わたしには同じことばと響いてきます。

わたしのいのちも、みなさんおひとりおひとりのいのちも、願われて生かされているいのちです。阿弥陀さまはわたしたちひとりひとりに、「生き抜いておいで、いつもいっしょにいるから」とおっしゃってくださいます。わたしは

はその仰せに従いながら、なんまんだぶつとお返事申し上げながら、生き抜いていきます。

「真宗宗歌」の三番にこのような歌詞があります。

「み仏(おや)の徳の とうとさをわがはらからに 伝えつつ 浄土(みくに)の旅を ともにせん」

この歌をお同行のみなさんと歌うたびに、わたしはうれしくなります。みなさんとともにお念仏申しながら、仏さまになることを目的として生きているのだから、あとしみじみ感じます。

今日のご縁を大切にしながら、お浄土への道をお念仏申しながら、皆さまとともに歩ませていただきたいと思いません。

最後にもう一度、初めに読ませていただいた「顕浄土真実教行証文類 総序」のおことばを味わいたいと思います。

「ああ、この大いなる本願は、いくたび生(せい)を重ねてもあえるものではなく、まことの信心はどれだけ時を経ても得(え)ることはできない。思いがけずこの真実の行と真実の信を得たなら、遠く過去からの因縁をよろこべ。もしまた、このたび疑いの網におおわれたなら、もとのように果てしなく長い間迷い続けなければならぬであろう。如来の本願の何とまことであることか。摂(おさ)め取つてお捨てにならないという真実の仰(おほ)せである。世に超えてたぐいまれな正しい法である。この本願のいわれを聞いて、疑いためらつてはならない。」

本日は尊いご縁をいただき、ありがとうございます。

合掌

(平成二十六年十一月三日 興禅寺さま 報恩講にて)

〈現代語訳〉

最後にもう一度、初めに読ませていただいた「顕浄土真実教行証文類 総序」のおことばを味わいたいと思います。

「ああ、この大いなる本願は、いくたび生(せい)を重ねてもあえるものではなく、まことの信心はどれだけ時を経ても得(え)ることはできない。思いがけずこの真実の行と真実の信を得たなら、遠く過去からの因縁をよろこべ。もしまた、このたび疑いの網におおわれたなら、もとのように果てしなく長い間迷い続けなければならぬであろう。如来の本願の何とまことであることか。摂(おさ)め取つてお捨てにならないという真実の仰(おほ)せである。世に超えてたぐいまれな正しい法である。この本願のいわれを聞いて、疑いためらつてはならない。」

本日は尊いご縁をいただき、ありがとうございます。

合掌

(平成二十六年十一月三日 興禅寺さま 報恩講にて)

〈あとがき〉

最後までお読みくださった、あるいは、手に取ってくださったみなさま、ありがとうございます。

興禅寺さま報恩講でのお話は、一時間ということでした。原稿を書き上げ、自宅で練習した時は時間内に収まっていたのです。ところが、いざ話し始めると脱線したのか、ふと時計を見ると間もなく一時間というところで原稿の半分ほどしか終わっていませんでした。ですので、後半の一部は割愛せざるを得ませんでした。

大谷派の竹中智秀さんのおことばを紹介したくて原稿を書いていたのに・・・それはともかく、ふだんぼーっと暮らしている私にとって、何をどのようにお話しするかを考えた二か月は充実した時間でしたし、とてつもない緊張感を味わうことも刺激になりました。また、お内陣を歩かせていただき阿弥陀さまの横を通るとき、思わず頭が下がるという経験もさせていただきました。

この拙い原稿を聞見会新聞に掲載してくださり、ほんとうにありがとうございます。

なもあみだぶつ

ご寄稿のお願い

「聞見会新聞」では、御同行様からのご寄稿をお待ちしております。

ご法話、感話、エッセイ、読み物、聞見会新聞の感想や、ご意見などでも結構です。ペンネームや匿名でもかまいません。お念仏の同行の声を、ぜひお寄せください。

詳しくは釋慈海、もしくは「聞見会」のウェブサイトをface book ページ等でおたずねください。

あなたの「言葉」をお待ちしております。

聞見会への ご寄付について

「聞見会」は、皆様の御懇志(寄付)によって運営されております。ご寄附は、左記口座へお振込みください。大切に預かりしまして活用いたします。

◆振込先◆

ゆうちょ銀行

記号…13310

番号…5415221

なまえ…モンケンカイ

※銀行からのお振込みの場合は

左の口座へお振込みください。

店名…三三八(読み サンサンハチ)

店番…338

種別…普通預金

口座…0541522

聞見会新聞 特別号

平成二十八年七月二十日 発行

発行人 聞見会

編集 釋慈海

編集 釋慈海・山田正之

この配布物および聞見会についてのお問い合わせは、左記までご連絡ください。

〔住所〕

〒919-0476

福井県坂井市春江町針原20-31

聞見会 釋慈海宛

〔電話番号〕

090-3295-8969(釋慈海)

〔メールアドレス〕

info@monken.org

※聞見会は浄土真宗本願寺派僧侶の釋慈海が主宰する聞法の会です。

※本誌はフリーペーパー(無料)です。聞見会員ならびに賛同して下さっている方々の御懇志とご協力によって発行しています。

合掌

なもあみだぶつ